HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	なぜディスレクシアのある子ども若者を指導しなければいけないのか？
Author(s)	品川, 裕香
Citation	子ども発達臨床研究, 6, 103-112
Issue Date	2014-12-05
DOI	10.14943/rcccd.6.103
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/57583
Type	bulletin (article)
File Information	AA12203623_06_103-112.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

なぜディスレクシアのある子ども若者を指導しなければいけないのか？

品　川　裕　香*

Why do we have to teach the dyslexic children?

Yuka SHINAGAWA

なぜディスレクシアを指導しなければいけないのか、なぜパソコンやタブロイドを駆使できるようになるだけでは不十分なのか。その理由は、ディスレクシアを持つ子ども、若者たちの姿を中心にご紹介することでご理解いただけるのではないかと考えている。

皆さんは『読めなくても、書けなくても、勉強したい』という本をご存じだろうか。井上智さんとおっしゃる方が執筆された本だ。今はご自身が建築された別荘の管理運営をしながら、NPO 法人を立ち上げて、発達課題のある若者たちの就労支援をなさっておられる。井上さんは 30 代のときは 100 人以上の社員を抱えた会社の経営者だった。そんな彼は 40 歳をすぎるまで、ご自分がディスレクシアだったとは知らなかったと言う。この本はそんなご自身のご経験をおまとめになった一冊だ。

現在 52 歳。彼は本を読むとき、冒頭から一文一文読むわけではないと言う。まず、読みたいページを開く、その見開きのなかからキーワードをいくつもピックアップする。そして、順不同でキーワード周辺の文章をかたまりごとに読んでいくのだそうだ。それでも読み終えたときには何が書いてあったかわかるとおっしゃっておられた。ただこの方法では、読むのに時間がかかり、理解するまで何度も読み返さなければならず、大変苦労すると言う。

「なぜ俺はばかじゃないのに、こんなに読み書きができないんだろう」。彼の悩みはこの一言に尽きた。運動神経が抜群でインターハイや国体に出るほどの選手。頭もよくて回転も速く、関西人には必須の笑いのセンスもあり、クラスの人気者の俺が、なぜみんなができる読み書きができないのか。彼は小学生のときにはすでにそんな思いでいっぱいだった。

バブル時代には、会社経営で大成功して北新地で毎晩接待だったとおっしゃっておられた。毎晩北新地で接待だなんて、彼がどれだけ成功していたか象徴するようなエピソードだ。しかし、どれだけ成功しようと、自分は請求書 1 枚書けない、領収書 1 枚書けないという思いがあり、そんな感情が彼の心の底に澱のようにたまっていった。請求書や領収書を書かなければいけないときは、蕎麦店に出前を頼んだ。そうして出前にきた店員を

*教育ジャーナリスト・編集者、発達性ディスレクシア研究会理事、北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター学外研究員

右手に包帯を巻いて出迎え、「兄ちゃん悪いな、わし、今、手けがしてて書けへんねん。代わりに書いてくれへんか、釣りは取っといてや」と言って書いてもらい、乗り切っておられたそうだ。

この話は、私も登壇した専門家向けの鼎談で、彼が会場の方々に向けて話したものだ。そのとき、会場は特別支援教育士、通級指導教室や特別支援教室、特別支援学校の先生方、臨床心理士やスクールカウンセラーなどの心理職等特別支援教育を専門に勉強し、日々実践されている方々であふれていた。

そういった先生方の多くが、井上さんに向かって「すばらしいスキルだ」とおっしゃった。「生きる知恵」「すごい」「感動した」と。すると、井上さんは少し黙って、言葉を丁寧に選びながら、こう続けたのだ。

「この話をすると、先生方はいつも〝それこそが生きる知恵だ〟〝スキルだ〟とおっしゃってくださる。そう言っていただくのはホントにありがたいことなのだが、でも当の本人してみたら、ものすごくみじめで情けないことなのだ。大の男が請求書一枚書けずに蕎麦店の店員にお願いしなければならないなんて。結局、包帯を巻いて自分で自分をだましてやっているわけだ。俺何やってんねん、という思いはずっとある」。

ディスレクシアのある子ども若者と関わるとき、私たちは彼らの心の底にある思い、きれいごとでは済まされない思いを知っておく必要があると私は痛感している。

というのも、これは井上さんだけの話ではないからだ。

私はこれまで多くのディスレクシアの子ども若者、そして40代50代の方々を取材してきた。

拙著『怠けてなんかない！』『怠けてなんかない！　セカンドシーズン』等で彼らのことは詳しく紹介してきたが、彼らの人生を伺うと、固有名詞が違うだけでどの方も経たような経験をし、同じような思いを抱えておられることがわかる。社会参加が難しいのは自閉症スペクトラム圏の方々だけではない。読めない、読みづらい、書けない、書きづらいことが実人生にもたらす不利益というのは、我々が想像する以上で、彼らがどれだけの困難と対峙しなければならないか。それはほかの発達的な課題を持つ方々と何ら変わりはない。

特に我が国では、知的に問題がないのであれば読み書き計算はできて当たり前と考える風潮が根強い。以前、麻生太郎元首相が「未曾有」を「みぞうゆう」と読んだとき、新聞もテレビも学者も評論家もこぞって彼を批判した。私は彼がディスレクシアかどうかは知らないが、「未曾有」は確かに字を見れば「みぞうゆう」と書いてある。これを「みぞう」と読むためには、「未曾有」は「みぞう」だと覚えている必要がある。ちょうど「海苔」が「のり」だと覚えるのと同じだ。「海」は「の」と読まないし、「苔」は「り」と読まない。このようにイレギュラーな読み書きが多い言語を透明性が低いというのだが、これらの例一つとっても、日本語は複雑な読みの体系を持つ言葉であることがわかっていただけると思う。

それなのに、「読み書き計算できて当たり前」と一般的には考えがちなのだ。これが移民をたくさん受け入れているほかの先進国との一番の違いだと私は考えている。移民が多ければ、在住する国の公用文字が読めなくても書けなくても、見た目が同じでも違う人種かもしれない、違う民族かもしれない、違う言語かもしれない、と想像力が働く。できて当たり前、ではなくて、できなくても不思議ではない。そこから入る。この発想が、残念ながらまだまだ我が国には欠けていると言わざるを得ない。

次に紹介したいのは、これまで多数の方々を取材してきた私にとっても、大変胸が痛んだ男性のケースだ。彼は、自分がディスレクシアだと知らず、専門的な教育を受けるチャンスもなく、読み書きが大変苦手なまま中学を卒業し、高校に進学するもドロップアウトする。就職もうまくいかず、

紆余曲折を経て、反社会的集団の下っ端になった。

ところが、親分の指示通りに動けなかった。彼はワーキングメモリも悪ければ聴覚認知も悪いので、親分から何々組の何々さんのところへ行って、どうこうしてこいと言われても、似たような名前のところの、違う事務所へ行き、指示とは違うことをしてしまう。本人は一生懸命なのに、そういう間違いを繰り返してしまった。だから彼は下っ端にすらなれなかったのだ。本人からしたら、反社会的な集団なら自分を受け入れてくれるに違いないと思って行ったのに、期待はずれだった。

結局、親分という人が「おまえはこの道には向かない」と言い、辞めさせられた。しかし、彼はそこを辞めたら行く場所がなく、今度はある政治団体に行く。ところが、そのグループはものすごく資料を読み、勉強をする団体だった。もちろん、彼は読むことが苦手なのでなかなか資料が読めなかった。結局、そんなこんなで街宣カーにも乗せてもらえなかった。学校もだめ、反社会的集団にも入れてもらえない、政治団体にも入れない。自分には生きる価値がないと思い、その後、彼は自殺未遂をしてしまう。ディスレクシア、読み書き障害があると分かったのはそれからずっとあと、随分大人になってからのことだった。自嘲気味に自分の人生を振り返って話してくれた彼に対して、私にはかける言葉がなかった。

私の『怠けてなんかない！』という本の最初の事例の女性は、今29歳になった。17歳のときにディスレクシアだと分かったけれども、一切教育的ニーズに応じた専門指導は受けていない。10年以上も前のことだし、彼女が小学校のときには、そもそもLDのことすら知っている人はほとんどいなかったので、理解されなかったのはしょうがないのかもしれない。

彼女の大変な日々については拙著をお読みいただければと思うが、なんとか高校を出て、無事に結婚した。実は取材後から毎年律義に年賀状が私のところに来ていた。毎年きれいな字で書かれていたのが強く印象に残っている。ちなみにこの女性はモデルのように美人でかわいらしく、かつ聡明な人でもある。生きる力が非常にある人だ。結婚した相手も、これまたイケメンの、本当に美男美女のカップル。私からするとほとんど娘のような感じなので、結婚式の写真も、娘の嫁入りを見るような気持ちでながめては喜んでいた。

その後、かわいい娘が生まれて、本当に大事に育てていることがよく分かる年賀状が毎年届いた。何もないことはいいことだ、相談が来ないことはいいことだと思いながら、年賀状をやりとりする日々がずっと続いていた。

ところが、昨年の1月、いきなりメールが来た。そのメールを読んで、私は号泣してしまった。そこには読み書きが苦手な彼女が母親として生きることの辛さが綿々とつづられていたからだった。

以下、本人の許可を得てメールより内容の一部分をそのまま紹介したい。

娘が小学校に行き始めてから悩みや苦労がたくさんになったこと、相談する相手もいない、ママ友も1人もいない中、本当に頑張る、頑張るで頑張っていること。

娘は普通に健康だけれど、自分がディスレクシアなために学校行事や毎日の学校からの手紙や、学校からの配信メールや、役員などにうまく対応できないこと。

母親の自分が1年生の娘が学校で学んでくる内容が分からないこと。勉強内容を把握できないことが親として情けなく、つらいこと。

娘の担任に自分のハンディのことを話してもなかなか理解してもらえず、ちょっとしたことも苦労がたくさんあること。連絡網を最後にしてもらうようにお願いしても何だかばかにされているような気がして仕方がないこと。電話に出ても、聞いてメモして、次に回すのがまったくできないこと。娘のクラスに迷惑が掛かってしまうから、連絡網は最後にお願いしますと言っても、ディスレクシアを理解してもらえず、手抜きをしようとしているなど誤解されること。

LDやディスレクシアがない人には悩みを話し

ても理解されず、ママ友や相談できる相手もなかなかできなくて苦しいこと……。

私は言葉を失った。これは2013年の話なのだ。しかも彼女の娘が通っている学校は、その地域では特別支援教育に熱心だということを打ち出している学校で、そこならディスレクシアのことも分かってもらえるだろうとわざわざ入学前に引っ越ししていたのだから。

娘は非常に聡明。だけど自分のせいで娘がいじめられたらと、彼女は苦しむ。なぜ彼女がそう思ったか。幼稚園のときにいじめられた経験があったからだった。幼稚園時代に、ママ友とうまく付きあえず、なんとなくママ友の間で浮いてしまったのだそうだ。ママ友の会話というのは、どこにお受験をするかとか、何々先生のうわさだとか、最新のランチがどうだとか、どこそこにしゃれた店があるとか、そんな話が多かった。つまりインターネットや雑誌で最新情報を知っていないとうまく付き合えなかったのだ。

彼女はそこがものすごく苦しかった。読むのが苦手だから最新情報が得られにくく、ママ友と話が合わない。しかも、彼女は常に自分で判断して生きてきた人。何々がはやっているからどこそこに行くというようなことをやってこないで生きている人だったのだ。ところが、ママ友たちは巷に溢れる情報にどっぷり浸っていた。雑誌を読み、ネットサーフィンをし、人気ブログを追いかける。そんなママ友たちと幼稚園のときに話が微妙に合わなかったため、娘がいじめられてしまった。「●●ちゃんのママは変、変わってるってうちのママが言っていた」と言われてしまって……。それで小学校では娘が嫌な思いをしないように、せめて発達障害に理解のある学校に行かせようと考え、校区ごとに学校を調べあげて引っ越しまでしたのだった。

ところが小学校でも同様の、いや、それ以上の問題が起こってしまった。たとえばPTAの役員問題。彼女はもちろんやる気はあるのだが、PTA役員という仕事を考えてみると読んだり書いたり、覚えて連絡したりなどディスレクシアの人たちが苦手とする作業がほとんどだ。PTA役員を引き受けるとなると、書記をやるのか会計をやるのか会計監査をやるのか広報をやるのか……書記は字を書かなければならないし、会計も会計監査も数字を扱う。広報は資料を読まなければならず、そこから発信もしなければならない。そのどれもがスムーズにできないからこそ、肩身が狭い。それがディスレクシアのせいだといっても信じてもらえなかった。

それだけではない。

たとえば「連絡網を最後にしてください」と言ったら、「次に回すのが面倒だからズルをしているんじゃないの」と言われてしまう。彼女が最後にしてほしいというのは、ディスレクシアの背景にある、聴覚認知の弱さや聴覚的なワーキングメモリの悪さ、あるいは聞いてもさっとメモが取れない書字のしんどさなどのためなのだが、いくらそれを伝えても理解されない。「障害を言い訳にしている」と言われたこともあった。彼女は筆舌に尽しがたい、大変悲しい思いを抱えていた。

彼女がそこまで言われてしまうのは娘が優秀なことからくるやっかみもあったのかもしれない。子育てがうまくいっているのは母親のせいで子どもが恥をかかないようにと、早くから自己決定できるように育て、マナーやルールを日々細かく教えているからだ。それらの結果、勉強も運動もでき友達も多い、クラスのリーダー的な娘に育っている。そんなターゲットを明確にした地道な指導は理解されず「PTAをさぼって子育てしている」などと揶揄されてしまっていたのであった。

彼女は非常に傷つき、拙著『怠けてなんかない！』を持って、「この本の、ここに書いてある、この女の子が私だ」と、担任に校長と教頭と特別支援教育コーディネーターを集めてもらって話を

した。そのとき、校長も教頭も担任も「お母さん、了解した。これからはメールも留守電も入れる」と言ってくれたので彼女もご主人も安心した。

ところが、実際はどうだったかというと、メールは来るには来たのだが、「連絡網がまわったので留守電に入れてある」という内容だった。この意味がお分かり頂けるだろうか。

彼女は留守電を聞いてもメモを上手に取れないから困っているのだ。しかし、メールに入っていたのは肝心の要件ではなく、「留守電に入れておいた」という、何の意味もなさない伝言だった。

つまり、担任や校長に「緊急連絡は視覚的にも聴覚的にもほしい」とわざわざ依頼したのにもかかわらず、特別支援教育に力を入れているというその学校の教師たちは、彼女の言っている真の意味がわかってはいなかったのだ。みなさん、お分かりいただけるだろうか？　ここはとっても大事なポイントだ。彼女の苦悩が分からない学校に、子どもの将来の可能性を見据えた徹底指導などできるのかと私は問いたいのだ。厳しいと言われるかもしれないが。

先ほども申し上げたように、彼女は学校の教師たちにも周囲の人にも理解も共感もしてもらえない。どうしてもわざとやっていると思われるのがつらいと繰り返していた。結局、まだまだ「フツウに見える人なのに読み書き計算ができないはずがない」という固定観念が根強くあるのだ。そこでものすごく苦労し、私に連絡をしてきたというわけだった。

彼女がこんなことを言っていた。

「『glee/グリー』というアメリカのドラマがあるのだが、『glee/グリー』を見ていたら高校生が、〝あ、僕はディスレクシアだからそこはこうして〟などと言う場面があった。アメリカではディスレクシアは普通のこと、日常なのだ。ごく当たり前にテレビに登場してくるような存在なのだ。なのに、どうして日本はいまだにこうなのか」。彼女は決して泣いたりしない。ただただ傷つき、怒り、悲しむ。高校生のころからがんばっていた彼女を知っているだけに、あれから10年以上経っても変わらない現実に私はひたすら怒りを感じるばかりだった。

ご主人は「妻と話すと彼女が聡明なことが分かるのに、なぜこんな簡単なものが読めないのかが分からない」と、最初はそういうところで非常に苦しんだと言っておられた。今、彼女の一番の理解者でありサポーターはご主人だ。それから、彼女のことをかわいがってくれているご主人のご両親だと聞いている。

この間、どうしても会いたいと連絡をもらい、私も心配だったので会いに行った。そのとき「いっぱい話したいことがあるので、申し訳ないが多めに時間を取ってほしい」と言われ、結局、5時間話をした。

5時間もの間、彼女は機関銃のように、今までずっとためていた思いを語り続けた。彼女の気持ちはこれまでお話したとおりなのだが、私が感心したのは、その5時間もの間、小学校2年生になった娘がじっと座って本を読んだり、ドリルをしたり、絵を描いたりしていたことだった。娘は自分でタイムスケジュールを組んでいたようで、5時間もの間コツコツといろいろな作業を行い、ただの1回も「ママ、もう帰ろう」とは言わなかった。集中力といい、マナーといい、食事の様子といい、申し分がなかった。

そんなところを見ている自分も職業病だなあと思うのだが（笑）、彼女に「この子を見れば、あなたがどれだけちゃんと子育てをしているかよく分かる」と伝えたら、彼女の顔がぱっと輝き「非常に嬉しい。でも、そういうふうになかなか分かってもらえなくて、すごくつらい。子育てについては、東日本大震災をきっかけに夫婦で考え直し、何があっても自分で生きていける子どもに育てようと決めた。そのために必要なことは何か、夫婦で1週間くらい話し合った。そして、困ったら助けを求められる子、自分で決められる子、人から

愛される子になってほしい、そのためにはルールやマナーも守れるようにと考えた」と。

すばらしいと私は思った。しかし、その背景にあったのは、震災の時、彼女が防災放送もよく聴きとれず、テレビの文字情報もよく読めず、本当にパニックし恐怖のどん底に陥った経験があったからと知って、あらためて私は胸を衝かれた。子どもを守れない、こんな自分はダメだと思ったのだそうだ。私は彼女の思いと覚悟に強く、強く胸打たれた。

みなさんに知っていただきたいのは、ディスレクシアを持っていて大変な思いをするのは就労する人たちだけではないということだ。学ぶべき時期に学ぶことができないと、専業主婦でディスレクシアを持っている人たちは行き場がなく、非常に辛いのだ。アスペルガー症候群を持っていて、やはりトレーニングを受けていない専業主婦も行き場がない。ADHD の主婦もやっぱり行き場がなく、非常に辛い。社会参加イコール就労ではない。専業主婦の方々もいろいろな形で社会に関わっていくのだ。だが、現状ではそこへのアプローチがまったくといっていいほどなされていない。そのことを踏まえても、私たちは読み書きの LD やディスレクシアの子どもたちに対して、少しでも疑いがあれば指導を徹底して行う必要があると私は考える。

こういうケースもある。

現在、派遣社員として働いておられる 20 代の男性の話だ。中 1 のときに LD ではないかと言われるのだが、専門指導は受けていない。中学校の先生は理解があり、「LD はキミの個性なんだから、そのままでいいんだよ」と言われていたそうだ。高校は普通高校に行き、その後専門学校を経て、何とかコネで地元の企業に就職した。

彼がどこで困ったかというと、社会に出てからだった。

上司の指示通りに動けない。言われることができたとしても、すぐにはできない。計算ミスが多い。資料の読み間違いが多い。読み書きのスピードが遅い。日報が書けない。言われたことを忘れてしまって何度も聞き返す。その都度上司がいら立ち、怒る。また怒られてしまったと言ってフリーズする。フリーズするからさらに仕事が滞る……。この悪循環が続いた。

結局 1 年で自主退職するのだが、次の仕事がなかなか見つからない。その後、派遣社員になるなど本人は頑張るが、派遣社員になっても抱えている問題が解決しないかぎり状況は変わらないわけだ。覚えるのが苦手。ホウ・レン・ソウができない。記憶するのが苦手だから正しく伝達ができない。日報が書けない。計算ミスをはじめ数字のミスが多い……。これらが苦手であれば正社員だろうが派遣社員だろうが働き続けていくのに困難が伴うのは想像に難くない。

最近、深く考えさせられたのが、50 代半ばの男性のケースだ。大学で外国語を学んだという男性で、1 年前に LD とアスペルガー症候群の診断がついたと言っておられた。

読むのは遅く、字はゆっくり書けばきれいに書けるそうだが、パッと書いたメモはほとんど読めず、書くこと自体がしんどいと言っておられた。ノートを見せてもらうと、ほとんどイラストになっていた。4 コママンガのようなノートなのだが、それが彼の学習のスタイルだ。

だが、彼はこのノートを小学校、中学校とずっと教師に批判されてきたと言う。ちゃんとノートを取れ、マンガを描いているんじゃない、と。指導する側の、この意識を変えるところからディスレクシアの子どもたちへの指導や支援は始まる。絵を描いたほうが分かるなら、ノートやメモは絵で記録してもいい。字を書かなければ評価しない、字を書くほうが正しい学びであるという限定された発想自体が、科学に反することになる。言って見ればそれは学習のスタイルの押し付けであり、子どもの教育権を保障していないことになる。もちろん字を書かなくていいと言っているわけでは

全くない。字を学ぶのは当然のこと、必須だ。だが、学びのスタイルをひとつに集約しようとしてはいけない。それこそが教育権の侵害になるのではないだろうか。

彼はテストで点が取れたので名門大学に行き、語学も覚える。卒業後は、語学を生かした仕事に就いた。若いときはよかったらしいのだが、すぐ仕事が回らなくなった。相手の会話が覚えられず誤訳する、連絡ミスの多発、メモの字が汚くて情報が正しく伝えられない、資料の読み間違いからの誤訳も多く、請求書のミスも多発。相手の指示通りに動けないなどの失敗が続き、結局、いづらくなって辞めてしまう。最初のころは語学ができたので比較的すぐに次の仕事が見つかったそうだが、年齢とともに時代の変化もあり、だんだんそういうわけにもいかなくなる。最後は派遣社員をやっていたと言っておられた。だが、どこにいっても同じような失敗を続けてしまい、最終的にはどれも辞めてしまうことになる。そのころから、家族ともうまくいかなくなって離婚し、アルコールなどの依存症になってしまい、入退院を繰り返しておられた。

ひょんなことから私の講演を知り、参加するために事前学習として図書館で拙著『「働く」ために必要なこと』を読み、初めて自分の特性に気付いたのだそうだ。LD だとかアスペルガー症候群ということは 1 年前に医者に言われて知っていたが、障害名を知っているからといって自分の脳神経の特性を知っているわけではなく、まして自分の課題に対する対処法を知っているわけでもない。本を読んで初めて、自分はワーキングメモリが悪いとか、視覚優位の学習のスタイルだとか、記憶は視覚的なほうがいいけれど理解するのは聴覚的なほうが優位だとか、空間把握が全然できないとか気付いたと言っておられた。本をもとにそれらを自分で分析し列挙していたのが大変印象的であった。

講演後に彼が話してくれたのはこんなことだった。

「50 代で気づくのは遅い。もちろん、気づかないよりは気づけたのはよかった。だが、僕は 10 代のときに気づいて対応策を学びたかったとつくづく思う。ここまで人生を失う必要がなかったような気がしてならない」。

非常に重い言葉だと、私は身が引き締まる思いで受け止めた。

何がいいたいかと言うと、自立して社会参加したくても、学生時代に苦手な読み書きの、ベーシックなところの訓練を受けなければ、就労しても専業主婦になっても課題は引き続き残るため、しんどさは増しこそすれ減ることはない、ということだ。

簡単なものが読めなかったり読みづらかったりすれば情報収集に遅れが出る。情報に遅れが出ればパフォーマスの差がどんどん広がっていく。職場だと信頼を失うこともあるかもしれない。こういうことが連なって失敗を繰り返すと、自己効力感が下がっていっても不思議ではない。

情報保障に限界があるということは、自己決定するときの判断材料が少ないことになり、生きていく上でのデメリットも受けやすいと考えられる。どう生きて、どう死にたいかなどということは人間の尊厳の根本とも言えるようなことがらだが、こういった基本的人権を行使するというような自己決定を行うときにも情報が得られにくいことになる。だから何も学校でだけ苦労するわけではないのだ。

だからこそ、読み書きが苦手だということが将来どういうことに繋がっていきがちなのか、知っておくべきなのだ。事態を軽く見てはいけない。だが、教育現場ではまだまだこのことを知らない方が多い。特別支援教育を勉強したからといってわかるとはいえないだろうし、勉強していないから分からないとも言えない。まずは、読み書きが

苦手だということは生涯を通して何らかの不利益を被りやすいことを了知していただきたいと思う。

実際、ディスレクシアの児童・生徒の現状をいうなら、まだまだ存在自体に気づかれないことのほうが圧倒的に多い。気づいてもらえたとしても正確な診断がなされづらい。正確な診断がなされないため、ニーズに応じた指導が徹底されない。音韻処理とか意味処理とか視覚処理を考慮した指導法や、教育的支援もまだまだ確立しておらず、普及もしていない。気づかれず、診断もされず、適切な指導も受けられなければ、当然〝合理的配慮〟も受けられないことになる。午前中、お伝えしたとおり、2016年4月1日から公的機関では合理的配慮の不提供の禁止が義務化されるため、やはり気づかなければならないし、アセスメントもしなければならないし、アセスメントを踏まえてニーズに応じた指導もしなければいけない。あと2年もないのに、これが現状だ。

これは、まだまだ専門家や国の課題であると言えるかもしれない。アセスメントが普及していないことは早急になんとかしなければならない。もっとも、テストさえやればいいというわけでもない。要は、定着できるようにいかに教えていくか、だ。アセスメントをしても指導に繋がり少しでも効果があがらなければ、意味はないと私は考える。厳しいだろうか？　実際、これまで話した方々のケースを見ても、IT機器さえあればいいというわけではないことが分かっていただけたのではないかと思う。

少し話題を変えたい。

未就職者卒業者数という、就職希望をしている学生のうち就職先が決まらないまま卒業した人たちがどれぐらいいるかという調査結果がある。2012年の場合、高校生が5,000人、大学生が4万3,000人、合わせて4万8,000人の学生たちが、就職を希望しているにもかかわらず就職先が決まらないまま卒業してしまった。

こういうデータもある。

新規就職者がどれぐらい離職するかという調査だが、就職しても3年以内で辞める人は中卒でだいたい5割、高卒でだいたい4割、大卒で3割。この5割、4割、3割という数字は、ここのところずっと変わっていないそうだが、この人たちも雇用する側から見たら熟練とか経験者とはみなされない。未経験者扱いだ。経験者と見做されるためには、やはり5年は働き、その業界の事情や職業技術を身に着けるだけでなく向上もさせたい。3年未満ではまだまだ経験者とは見なされにくいのが我が国の労働市場なのだ。

問題は、彼らが辞める理由に「考えていたような仕事ではなかった」とか「仕事が向いてない」ということをあげている点だ。この状態でハローワークへ行き、向いている仕事は何だろうと探しても、うまくいかない。教育機関ではないので脳神経のパターンや学習レディネスからは考えない。どうしても職業適性検査などを使い、営業がいいか、企画がいいか、経理が向いているかなどという方向から検討していくことになる。

ところで、いったん未経験者のままフリーターやニートになると正社員への道が遠のくということも調査でわかっている。静岡県立大学の調査では積極的に正社員として採用するという企業は1％しかない。それから特に区別せずに採用するが23％。あとは非正規なら採用する、と。つまり、未経験者は新卒で正社員にならない限り、正社員になるのが大変難しいのが我が国の特徴なのだ。ということはどういうことかというと、先ほどの4万8,000人と、それから離職者の5割、4割、3割の人たちは、数字上はなかなか正社員になりづらいといえるわけだ。

それから就労不安定者の苦手意識の調査もある。書くのが不得意、読むのが不得意、計算が苦手、手先が不器用、人に話すのが不得意など、学

習の発達的素地が全部あがっている。ということは、すなわちこういったベーシックスキルの訓練をしてから社会に出ないと、本人が不適応を起こすリスクが上がるということだ。

面接の申し込みを電話でするのが苦手。問題はなぜ電話が苦手かという点なのだ。電話で申し込む練習をいくらしてもその背景のところをトレーニングしなければ、なかなか効果はあがらないだろう。なぜ見て仕事を覚えるのが苦手か。これは視覚的なワーキングメモリの問題なのかもしれない。そういった発達の素地を指導しない限り、根本的な解決にはつながらない場合もありうるということを知っておいていただきたいと思う。だからこそ、ディスレクシアを含め、発達的な課題があれば教育的ニーズに応じて指導する必要があるのだ。

東京都の調査もぜひ見ていただきたい。

子どもの自尊感情についての大規模な調査を東京都教育庁が少し前に行った。それによると、自分のことが好きかという質問に対して「そうは思わない」「どちらかというとそうは思わない」と答えた中学生や高校生はだいたい 2 人に 1 人だった。

私が注目したのは「小学生は小 1 の 84％が肯定的な回答をしたが、学年が上がるにつれて、その割合は低下し、小 6 では 59％となっている」という一文だった。裏を返せば「小 1 の 16％はすでに自分のことを否定的に受けとめている」ということになる。そんな子どもたちにいったいどんな未来が描けると言うのか。

私がこれまで取材してきたディスレクシアを持つ子ども若者たちはみな、小 1 の 1 学期にみんなができることができない自分はバカだと思ったと言っていた。みんなが読める字が読めない、みんなが書ける字が書けない。もちろん、ほかにも虐待されている子や友達とうまくかかわれない子もいると思う。とにかく、10 人に 1 人以上、もしかしたら 5 人に 1 人はそんなふうに自分のことを考えている小学 1 年生がいるかもしれないということなのだ。そこそこが問題なのだと私は考える。だからこそ、この数字をスルーしてはならない。真剣に受け止めなければならないと思っている。そして、この数字のなかにディスレクシアの子どもたちも含まれているかもしれない可能性を忘れてはいけないと思うのだ。

もう時間なので終わりにするが、最後に一つ。

犯罪学では、一般的に少年が逸脱する可能性を上げるものを「リスク要因」と言う。リスク要因は、影響度が強いものと弱いものなど影響度の違いがある。それからリスク要因による被害の効果を減少させるものを「保護要因」と言う。誰にでもリスク要因はある。ここには男女共いらっしゃるが、男に生まれただけですでにリスク要因を一つ持っていることになる。なぜなら〝being male〟、つまり男性であることがすでにリスク要因にあがっているからだ。

リスク要因・保護要因には 5 領域ある。「本人」の領域、「家族」「学校」「地域」、そして「ピアグループ」、つまりその子が関わっているグループの仲間の 5 領域だ。

リスク要因をたくさん抱えているからもうダメ、必ず逸脱するのだ、というわけではない。リスク要因があれば少しでもそれをコントロールする、変えられるリスク要因は少しでも変えていく、少なくする、下げるというふうに考える。

逆に、保護要因は少しでも準備する、本人の身につけさせる、強化していくのだ。結局、リスク要因がいくつも重なり合い、保護要因が少ないときに、人は逸脱し、不適応を起こしてしまう。発達障害があって、理解されず、結果として非行になる、非行は二次障害だと言う専門家がいるが、それは犯罪学のエビデンスとは合致しない。犯罪学はそうは考えない。なぜなら逸脱はそんな単純な話ではないからだ。それから虐待を受けているから暴力を振るう、そんな単純な話でもない。家庭のしつけが悪いから暴力を振るう。そんな単純な話でもない。そこをぜひ理解していただければ

と思う。

知っていただきたいのは学校のリスク要因に、学力が低い、学校に行かない、ルールに価値を見出さない、仲間から疎外される、頻繁な欠席や頻繁な転校、学習障害者として識別する、教師の指導力不足、小学校4年生レベルの読み書きができないなどがあるということ。学習障害者として識別するというのは、ラベリングだけして指導はしないということだ。「ゆかちゃんはLDだけど、みんな違ってみんないいから、無理しなくてもいいよ」と。これは、学習障害者として識別しただけなので、実はリスクを上げていることになる。

そして、あらためて、なぜ読み書きの指導が必要か。

本人たちが苦しくしんどい思いをするのはわかっていただけたと思うが、犯罪学上も「小学校4年生レベルの読み書きができないのは、将来、社会不適応を起こすリスク要因」だというエビデンスがあるのだ。つまり、最低限、4年生レベルの読み書きができるということが、その子たちの将来の自由を、自立と社会参加を保障する一助になるということをぜひ知ってほしいと考える次第である（談）。